聴かれなかった声

最適化の功罪

文：難波優輝
イラスト：華沢寛治

© Hitachi, Ltd. 2021. All rights reserved.

スイッチを入れると、ブウン、とパソコンが眠たげに目を覚ます。その間に着替えて入念にうがい手洗いをして、ノンアルコールとスーパーの値引き惣菜を両手にゲーミングチェアに腰掛けコンタクトからメガネに掛け変える。仕事帰りのいつものルーティンだ。

ブラウザのブックマークをクリックすると、《Cyber-PoC》という蛍光グリーンの文字がディスプレイに浮かび上がる。黒背景が特徴的な洗練されたトップページから投稿フォームにアクセスする。

今日もバイカーさんとマキナさんがすでに熱いレスバトルを行っていた。

＞バイカーさん から マキナさん へ
＞だからお前の配置には美学ってもんがねえんだよ。極力二酸化炭素排出量を減らして、自転車や電動キックボードで交通網を作り出す。それがニューノーマルだろうが。
2023.4.15.18:33.55

＞マキナさん から バイカーさん へ
＞おもしろい美学ですなあ。自転車だけで交通が賄えるわけあらへんのによう頑張ってはる。現実を見てみたらどないです?ほら、ここなんか、家族連れしかいはらへんのに、電動キックポートしかありません。小さい子ども抱えてどないしてこれで行きはんのでしょうかねえ? 失礼ですけど、アホなんでっしゃろか?
2023.4.15.18:34.33

わたしは二人に挨拶する。

＞モモさんが入室しました。
＞モモさん から バイカーさん & マキナさん へ
＞やほ。二人とも今日も仲いいね
2023.4.15.18:35.00
＞どこがだよ
2023.4.15.18:35.3
＞どこがですねん
2023.4.15.18:35.3

「やっぱ仲いいじゃん」

二〇二〇年の新型ウイルス流行により、以前から疲弊していた体力のない公共交通の運営は相次いで破綻し、従業員の削減から始まり赤字路線は消滅していった。

© Hitachi, Ltd. 2021. All rights reserved.

そんな中、インターネットを介して広まり始めたのが都市開発シミュレーターCyber-PoC（CP）だった。鉄道事業者や自治体がコロナ対策のために蓄積した都市交通のデータをインターネット上で一般市民にオープン化、住民主体で新たな都市機能や交通を提案できるようになっている。

いまなお根強い愛好家のいる都市経営シミュレーションゲームのように、だが、もっと特殊に、バスや電動バイク、鉄道などを配置、適切な都市交通をみんなで仮想実験し、互いにコメントし合う。CPプレイヤーと呼ばれるわたしたちはまさしくゲーム感覚で都市シミュレーションにドハマリしていた。

CPを提供するモビリティ企業とゆるやかに連携する形でそれぞれのCyber-PoCデータを投稿し合うプレイヤーたちが集い、大手動画配信サービスのようにCP実況をしたり、都市交通情報や配置のテクニックをシェアしていたり、何より、それぞれのシミュレーションへの「高評価」やコメントを求めて切磋琢磨していた。

様々な自治体やコミュニティは、自分たちの地域の都市交通の問題を解決するために、いくつものコンテストを開催することで優秀なシミュレーションモデルを探し出そうとしている。既存の都市交通の資源を活かしたコンテスト、特定の自治体の特有な状況を解決するためのコンテスト、あるいは、日本全体をグランドデザインするような巨大なコンテストなど、それぞれの課題を体現したイベントが行われていた。こうしたイベントで優勝したり、よい成績を残し政策・行政担当者の目に止まったなら、実際の交通政策に採用されることも少なくない。

そういうわけで、CPプレイヤーたちは、バイカーさんやマキナさんのように自分の美学を追求するために、はたまた都市デザイナーとして名乗りを上げることを求めて、それぞれのCPをプレイしている。わたしもまた、都市をよりよい場所にしたいと願う、駆け出しの都市デザイナーだった。

／お前今度のコンテストで今度こそ決着つけてやる。おれの環境への美学でな！
2023.4.15.18:37.34
／お手並み拝見してもらいますわ。環境は大事ですけど、あんまり大事にしすぎてしまいにはモビリティを全否定して、人間をみんな歩かせはるんちゃうかと心配ですわ。
2023.4.15.18:37.59

CP実践の最先端が、この二人のレスバトルというわけだった。「民主主義の失敗」「インターネットの悪いとこを煮詰めた罵詈雑言」と揶揄する人もいる。でもわたしは結構気に入っていた。互いに罵り合う、これも民主主義の一つの正しい姿に思えるから。様々な

© Hitachi, Ltd. 2021. All rights reserved.

「声」が響き合い、ときに不協和音をも響かせる。
わたしもレスバトルに割り込みながら、仕事帰りに思いついたシミュレーションモデルについて二人に話し始めた。

＊

ある日、仕事から帰るとメールボックスに見慣れぬ連絡が入っていた。何だろうと思い差出人を確認してドキリとした。中村市まちづくり計画課、とある。急いで開封した。わたしの都市シミュレーションモデルの採用を検討したいとのことだった。
まさかと思う反面、とうとう来たかと納得してもいた。わたしの投稿した「モモモデル」――最適化を重視しながら、オンデマンドバス、レンタルサイクルや電動キックボードなどを中核とする小回りの効く都市交通――には、数多くのいいねやコメントが付いていた。ある有名実況者がモモモデルを取り上げ絶賛したのをきっかけに数ヶ月前から急激に反応が増え、いくつかのCPイベントに解説役のような立場で出始めていた矢先だった。
わたしは中村市に思い入れがあった。自分の生まれ故郷で祖母の住む街。CPでは複数の地方都市の都市デザインを投稿していたが、やはり一番力を入れていたのは中村市だった。今は東京で就職し、もう何年も帰っていない。でも「中村市」という文字を見たときまっさきに懐かしい祖母の姿が思い浮かんだ。
しばらく先方とやりとりした後、まずは限定的に導入することになった。半年ほどの経過を経て、CPの通りに財政負担が軽減され、地方の公共交通を救うモデルプランとして脚光を浴びた。あれよあれよという間に、中村市の近隣から始まり、いろいろな地域で同じように「モモモデル」が導入されていくことになった。
バイカーさんやマキナさんは手放しに（罵倒を込めながら）喜んでくれた。

＊

一年後、わたしは独立し、本格的に都市デザイナーの仕事を始めていた。その矢先、母親から祖母が倒れたとの連絡を受けた。早く、早く、と願いながら交通機関を乗り継いでいく。民営鉄道、オンデマンドバス。
病院で祖母はぐったりはしていたが、「モモ！わざわざ来てくれんでも！」と変わらぬ大きな明るい声で笑いながらわたしをぎゅっと抱きしめてくれた。
「急に心臓がばくばくいうてな。いや、前もあったけど、ここまでひどなるんはほんとに久しぶりやった」

© Hitachi, Ltd. 2021. All rights reserved.

持病の心臓の病気が発症し、通りでうずくまっていたところを見かけた人が救急車を呼んでくれたとのことだった。

「最近、外に出歩くんが億劫になってしまってな」祖母は白湯を飲みながら窓を見つめ、ぽつりと呟いた。

祖母は、交通が不便な地域に住んでいた。昨年までは近所を通っていた路線バスに乗って買い物や友達の家、病院に通っていた。

しかし、昨年から都市デザインの見直しで路線バスが激減、オンデマンドバスに置き換わったことで、祖母は外出を控えるようになったと言う。

「あの、オンデマンドというやつの使い方が分からんでな……やってみても物忘れで、約束の時間を何度か忘れてしもて、申し訳なーてな」

代わりに配達サービスが安うなってくれたおかげで食べ物には困らんようなったけどな。と祖母は笑う。友達ともそう言えば会っとらんし、同じ時間に同じバス停で見かける知り合いにも。祖母が語るたびに、わたしはいやな予感が高まっているのを感じた。

「モモ？ 具合わるいんか？」

「いや、あはは。倒れたのおばあちゃんの方でしょ？ なんでわたしの心配してるの？」

＊

バスに揺られながら、わたしは祖母の住む中村市の近隣自治体のまちづくり計画課にアクセスしていた。

「やっぱり……わたしのモデルだ」

当の自治体はモモモデルを採用していた。効率的で、オンデマンド、ひとりひとりのニーズに合わせた設計。だが、それは様々なデジタルなシステムを利用できたり、周りにサポートしてくれる人にとっての最適解なのかもしれなかった。

外出機会が減り、病院での定期健診が減って持病の悪化が分かるのが遅れてしまったのかもしれない。

自分が作ったあの効率的なモビリティシステムは本当にみんなにとって良いものだったのだろうか？ 祖母の声を聞きながら、わたしは自分が聴き逃した声について考えている。

（終）

© Hitachi, Ltd. 2021. All rights reserved.